
瀬戸内海研究フォーラム in 山口
開催結果の概要（平成25年8月9日～10日）

<テーマ>

ゆたかな海の再生
～いま求められる文化・環境維新～

<趣旨>

2011年3月の東日本大震災とそれに続く原発事故以降、新しい価値観を模索しようとする動きがみられます。瀬戸内海についていえば、水質はきれいになりましたが、水産業は低迷しています。「何故なのか」「どうすればいいのか」という人々の問いかけに対して、研究者も適切な答えを示すことができていないように思われます。ここで一旦立ちどまり、すくなくとも戦後の高度経済成長から現在に至る、われわれの来し方を振り返ってみて、これまでの考え方を総点検してみる必要があるのではないのでしょうか。

山口県は西の京として栄えた大内文化や明治維新発祥の地として有名で、山頭火や金子みすずを生み出した土地でもあります。また開催地である宇部市は国連環境計画UNEP からグローバル500を受賞した環境先進都市として知られています。

本フォーラムでは、瀬戸内海を舞台に、国際的な視点も交えながら、文化・環境維新、すなわち、豊かな環境とゆとりある文化を取り戻すために目指すべき方向性について考える場としたいと思います。

<日程・場所>

平成25年8月9日～10日 宇部市文化会館文化ホール（山口県宇部市）

<関係機関>

主催：特定非営利活動法人 瀬戸内海研究会議
共催：瀬戸内海環境保全知事・市長会議、(公社)日本水環境学会中国・四国支部
協賛：(公社)瀬戸内海環境保全協会、(公財)福武財団、応用生態工学会
後援：環境省、山口県、宇部市、山口県教育委員会、山口大学、山口県立大学
(独)水産大学校、宇部工業高等専門学校、山口県瀬戸内海環境保全協会
NPO法人うべ環境コミュニティー、KRY山口放送、TYSテレビ山口、NHK山口放送局
宇部日報社、FMきらら

<瀬戸内海研究フォーラム in 山口運営委員会>

委員長：浮田 正夫（山口大学名誉教授、特定非営利活動法人瀬戸内海研究会議理事）
幹事長：関根 雅彦（山口大学大学院理工学研究科教授）
委員：湯川 洋司（山口大学人文学部教授）
山本 浩一（山口大学大学院理工学研究科准教授）
須田 有輔（(独)水産大学校水産学研究科教授）
杉本 憲司（宇部工業高等専門学校物質工学科講師）
鳴瀬 嘉史（山口県環境生活部次長）
白石 光芳（宇部市市民環境部長）

オブザーバー：山口県環境生活部環境政策課
山口県環境保健センター
宇部市市民環境部環境政策課

8月9日(金) 13:00~18:40

◎ 開会

13:00~13:25

1. あいさつ 特定非営利活動法人瀬戸内海研究会議 理事長 松田 治

瀬戸内海研究フォーラムは、瀬戸内海関係の13府県を回りながら開催させていただいており、前回山口で開催したのは1995年で、18年前になる。本フォーラムは、瀬戸内海環境保全知事・市長会議、(公社)日本水環境学会中国・四国支部との共催となっており、さらに多くの団体の協賛・後援をいただいている。特に山口県と宇部市、山口大学の皆様には運営スタッフとしてもご協力いただいております、この場を借りてお礼申し上げます。

瀬戸内海環境保全特別措置法(当初は臨時措置法)が制定されたのが1973年で、今年で40周年になる。瀬戸内海の在り方を振り返り、将来のことを考える非常に良い機会である。現在、中央環境審議会をはじめ、環境省で将来計画について具体的な検討が進められているところであり、本日・明日の議論や情報交換が役立つことを期待している。

本フォーラムは、いわゆる学会の発表会などではなく、瀬戸内海研究会議として、なるべく分野横断的に、学際的に人がつながることを期待しており、会場にはいろいろな分野、立場の方が集まっているので、ぜひ交流を深めていただき、本フォーラムのテーマである「ゆたかな海の再生」につながっていただければと思っている。

瀬戸内海研究会議は、昨年までは任意団体であったが、今年度から特定非営利活動法人へと移行した。引き続き皆様のご支援、ご協力をお願いしたい。

2. 祝 辞 環境省水・大気環境局水環境課閉鎖性海域対策室長 名倉 良雄

瀬戸内海はかつて「瀕死の海」と呼ばれていたが、研究者や行政関係者、企業、地域住民が一丸となり、環境改善の取り組みを行ってきたことで、かなり環境は良くなったといわれている。一方、瀬戸内海全体としてみると、依然として赤潮による漁業被害、貧酸素水塊等の発生、有機物質等の蓄積、漁業生産量の低迷、ノリの色落ち、藻場・干潟の減少等の様々な課題がある。海水温の上昇や生物生息環境の悪化等による生態系への影響の把握、豊かな瀬戸内海に向けた取り組みが求められている。

環境省では、これらの課題について整理をし、今後の方向性を示すものとして、昨年10月に中央環境審議会から瀬戸内海における今後の目指すべき将来像と環境保全・再生の在り方についての答申をいただいた。この答申に基づいて、マスタープランである瀬戸内法に基づく瀬戸内海環境保全基本計画の見直しについて調査・審議することを目的として、中央環境審議会水環境部会のもとに瀬戸内海環境保全小委員会が設置された。平成26年夏頃には答申をいただき、基本計画を閣議決定すべく、検討を進めていくところである。今後もさらに瀬戸内海の環境保全に取り組んでいくので、研究者、関係自治体の皆様にもお力添えをお願いしたい。

3. 祝 辞 山口県知事 山本 繁太郎

(代読：山口県環境生活部次長 鳴瀬 嘉史)

瀬戸内海研究フォーラムが山口県宇部市で開催されることは、誠に喜ばしく、ご来県された方々を心より歓迎する。

瀬戸内海については、かつて「瀕死の海」と呼ばれるほどに水質汚濁が進んだ時代があったが、瀬戸内海環境保全特別措置法の施行や関係各位の長年にわたる積極的な取り組みにより、改善が進んできている。しかしながら、環境基準未達成の水域があることや底質の悪化、漂着ゴミ、生物生産性の劣化、海水温上昇などによる漁業への影響など、まだまだ課題が残されている。本日のフォーラムの成果が、「美しく、多様な生物が生き、賑わいのある豊かな瀬戸内海」の実現につながることを切に願うとともに、今後とも瀬戸内海の環境保全に向けてさらなるご尽力を賜りますようお願い申し上げます。県としても豊かな瀬戸内海の創造を目指して、海域だけでなく、森・川・海すべてと連なる環境の保全と創造に向けて、相互的な取り組みを進めていくこととしているので、皆様のご支援・ご協力をよろしくお願いしたい。

本県は、多島海の瀬戸内海はもとより、海岸線の美しい響灘、波荒く勇壮な日本海、三方が海に開かれ、美しい自然を有している。また、幻の高級魚と呼ばれるキジハタ等様々な食材にも恵まれている。皆様方には、県内各地を巡り、山口県の魅力を感じていただきたい。

4. 趣旨説明 瀬戸内海研究フォーラム in 山口 運営委員長 浮田 正夫

瀬戸内海研究フォーラムは1992年から開催が始まり、山口県では2回目の開催になる。前回は18年前に山口市で開催し、この年は1月に阪神淡路大震災があった。2011年には東日本大震災とそれに続く原発事故が起こった。これ以降、これまでの我々の文明の在り方を考え直す時期に来ているのではないかと感じている。瀬戸内海についても、昔は赤潮も非常に多く、汚れていた。現在は、見た目には非常にきれいになったが、生産量が低迷している。これは、様々な原因が複合しており、明確に答えを出すことができない。現在の環境問題は全般的にこのような状況になっているのではないかと。我々のこれまでの考え方、人と自然との関係などを根本的に考え直すべき時期ではないかと考えている。

宇部市は、1950年代の大気汚染の改善を国際的に認められ、1997年にグローバル500を受賞している。また、山口県は歴史的にみると、中世には大内文化があり、明治維新発祥の地でもある。このような背景から、本フォーラムのテーマを「いま求められる文化・環境維新」とさせていただいた。本フォーラムがこのようなことを考えるきっかけになれば幸いである。

◎ 研究発表

第1セッション

13:30~15:30

テーマ： もり・かわ・うみの保全と再生

座長： 関根 雅彦（山口大学大学院理工学研究科 教授）

本フォーラムのチラシには、「水質はきれいになったが水産業は低迷している。『何故なのか』『どうすればいいのか』という人々の問いかけに対して、研究者も適切な答えを示すことができていないように思われます」と書かれている。環境問題すべてにこのような側面があり、非常に複雑な要素が絡み合っており、因果関係が分からない。このようなものをなんとかしていこうというのが環境に対する取組であろうと考えている。

第1セッションは、(公社)日本水環境学会中国・四国支部の開催している「第43回水環境フォーラム山口」と共催する形となっている。本セッションでは、『何故なのか』『どうすればいいのか』ということに対して、この地域がどのような取組を行ってきたか、まずは現状を見ていただこうと考えている。

☆榎野川河口域干潟自然再生について

元永 直耕（山口県環境生活部自然保護課 主任技師）

山口県では、「豊かな流域づくり構想」について榎野川をモデルとして作成している。

森・川・海をつなぐ取組として、榎野川河口域干潟再生について発表する。

榎野川流域には、森林荒廃、都市部への人口集中、漁獲量の低下、干潟環境の変化に加えて、行政の施策が分野ごとに個別に行われていたという問題点があった。関係自治体による連携した取組が重要であり、将来の方向性を示した指針が必要であると考え、県として「豊かな流域づくり構想」の策定へとつながり、地域の特色ある流域づくりを目指した。

榎野川河口域干潟では、生物生産と生物多様性の減少がみられる状況であった。干潟の再生を効果的に進めるために、産学公の連携・協働による取組を目指し「榎野川河口域干潟再生協議会」を設立し、最終的には里海の再生を目指している。自然再生の視点として、①生物多様性の確保、②多様な主体が参画する産学官民の連携・協働、③科学的調査に基づく順応的取組を基に活動を実施することとしている。上流域から下流域までの流域に関わる全ての主体が連携・協働して流域づくりに取り組むことで、豊かな干潟等の再生ができ、後世につなげていくことができると考えている。

☆魚の餌としてのアサリ

重田 利拓（（独）水産総合研究センター瀬戸内海区水産研究所 研究員）

瀬戸内海のアサリ漁獲量は1985年をピークに激減した。原因はよくわかっていないが、最も強く疑われているのは、海の栄養が足りなくなったことである。一方、干潟を生息場所とする魚種も非常に減っている。干潟の面積については、1970年以前に少し減ったが、以降はあまり変化していないため、生息場所がなくなったことでアサリが減ったというわけではないようである。

干潟に生息する魚類は、よくアサリを食べるようであるが、食べ方が異なっている。ナルトビエイやクロダイ、フグ類はアサリを丸ごと食べている。イシガレイやアイナメなどは、アサリを丸ごと食べるのではなく、水管だけを食べる。アサリにとっては、丸ごと食べられれば個体が死んでしまうが、水管だけを食べられても2～3週間で再生し、死ぬことはない。

イシガレイ、アイナメ、キュウセン、トラフグ、アオギスについては、アサリの減少とともに漁獲量も減少する傾向がみられ、アサリ資源の変動とこれら魚類の漁獲量との間に何らかの関係があると考えられる。一方、クロダイについてはアサリが減っても、漁獲量は減っておらず、アサリに対して強い食害を与える魚種ではあるが、アサリのみには依存していないと考えられる。

アサリを食害から保護するという視点から考えがちですが、魚の餌としてのアサリというとらえ方が重要であり、今後の干潟再生の目指すべき方向として、アサリ1.5～3.0トン/haの生産を目標とする考えが示された。

☆河川改修工事に伴うヒヌマイトトンボの保護対策

野村 佳史（山口県宇部土木建築事務所 主任）

山口県都市計画街路事業及び河川開発事業予定地内に絶滅危惧種のヒヌマイトトンボの生息地が確認されたことから、消滅する部分の代償措置として、学識経験者で構成された委員会の助言を受けて、平成12～13年に生息地の代替地の整備を行った。整備後には本種の個体数が増加したが、近年大きく個体数が減少したため、再度委員会を設置し、平成23～25年度に既存代替地の環境改善を行った。本講演では、主に実施した工事の内容について説明する。

第2セッション（ポスターの概要発表）

15:45～18:00

テーマ： 環境保全・創造に関する研究並びに活動報告

座長： 山本 浩一（山口大学大学院理工学研究科 准教授）

26件のテーマ別に、各4分の時間配分で順次発表がなされた。

なお、内訳は次のとおり

- | | | |
|-----------|--|----|
| ＜内容区分別＞ | ・ 栄養塩関係 | 6件 |
| | ・ 底泥・流動関係 | 6件 |
| | ・ 生物関係 | 6件 |
| | ・ 活動関係 | 8件 |
| ＜発表者の地域別＞ | 地元山口県 11件、四国地方 6件、近畿地方 5件、九州地方 1件、中国地方 3件 | |
| ＜発表者の所属別＞ | 大学 16件、高等専門学校 1件、団体 3件
公的試験研究機関（法人含む） 6件、 | |

◎ 特定非営利活動法人瀬戸内海研究会議通常総会

18:00～18:40

特定非営利活動法人瀬戸内海研究会議の平成25年度通常総会が開催された。

◎ 懇親会

19:00~20:30

山口大学生協医心館（山口大学医学部内）

8月10日（土） 9:30~17:00

◎ 研究発表

第3セッション

9:30~11:30

テーマ： 水産業の取り組み～ゆたかな海をとりもどす

座長： 須田 有輔（（独）水産大学校水産学研究科教授）

日本にとって水産は外すことのできない極めて重要な要素であり、豊かな海かどうかは、豊かな水産業が行われているかどうかで判断できるといっても過言ではない。しかし、近年水産業は様々な困難に見舞われている。ウナギやマグロに限らず、日本各地で魚が採れなくなったという話をよく聞く。沿岸漁業だけに限ってみても、最盛期の半分程度にまで落ち込んでいる。このような漁業生産の減少の原因には、乱獲や国際情勢の変化、漁業構造の変化等、様々な問題が複雑に絡み合っており、ひとつに特定することはできないが、魚の生息環境の悪化が大きな原因の一つではないかと考えている。

瀬戸内海のような内湾域では、以前は富栄養化が大きな問題となっていたが、最近では逆に貧栄養化の問題が大きく取りざたされている。また、開発に伴う生息場の消失や環境の劣化に加え、最近では温暖化に伴う南方系魚類の進出による貝類・海藻類への食害も増えており、水産関係者を悩ませている。

本セッションでは、水産業の観点から、どのようにしたらたくさん魚の捕れる豊かな海を取り戻せるかを議論したいと考えている。

☆瀬戸内海等における一次生産量の推移について

横山 佳裕（（一財）九州環境管理協会環境部環境技術課 係長）

大阪湾では、近年窒素、リンともに減少傾向だが、その他の瀬戸内海については、ほぼ横ばいである。赤潮発生件数は、以前は減少傾向であったが、近年はほぼ横ばいである。東京湾では、海域の窒素・リンは減少傾向であるが、赤潮発生件数はほぼ横ばい。三河湾では、窒素・リンの流入負荷は減少傾向であるが、近年の赤潮発生件数はほぼ横ばい。クロロフィル a をみると少し増加している。有明海では、流入負荷量はほとんど変化がないが、赤潮発生件数はやや増加し、近年は横ばいである。博多湾は福岡市に面しており、人口が増加傾向であるが、下水処理区域を拡大しており、窒素の流入はほぼ横ばいである。リンについては、高度処理を導入し負荷量を抑制しており、リンの負荷量削減により一次生産を抑制する方策が行われている。赤潮発生件数も減少しているが、近年は横ばいである。クロロフィル a は減少傾向である。

漁業者によれば、以前は赤潮も発生し魚も死んだが、その後すぐに回復していた。近年は死亡する魚がみられないが、生きていた魚もみられないという状況を耳にする。海域が必要とする栄養塩量、一次生産量は海域ごとに異なるので、適切な目標を定めて海域管理を行う必要があると考える。

☆里海を実現する小わざ

浜野 龍夫（徳島大学総合科学部社会創生学科 教授）

漁業就労者は主に50~80代であるが、先行きの不安を訴える声が多くなった。漁業者は主にアワビやサザエの漁獲を期待するが、現実的にはこれらを増やすことは難しく、減っていくことを認めなければならない。次の収入源としてヒジキ養殖を試みることになったが、収益を考えると、家族労働となるため、少人数・小スケールで作業可能な設備を考える必要があった。また、後から参入したヒジキ養殖が、先に天然ヒジキで生計を立てる漁業者を圧迫することは避けなければならない。養殖を続けるカギは、いかに苗を供給するかにかかっており、徳島県内で採苗・育苗できるような計画とした。

魚類の稚魚が光に集まる性質はよく知られている。電源に太陽光パネルを使用した LED 水中灯を自作し、試したところ、集魚効果が確認された。港外で魚を集めてから水中灯を港内へ移動させると、魚群を誘導することができた。問題点は、光を使用した集魚法は、多くの海域で遊漁者でも自由に行えることであり、漁業調整規則等の見直しが必要であると考えられる。

☆山口県における水産振興対策

金近 哲彦（山口県農林水産部水産振興課 主任）

山口県の瀬戸内海では、様々な漁業が営まれている。水産資源を回復させ、持続的に管理することは、漁業者が将来にわたり安定した収入を得るために避けては通れない課題である。しかし、様々な漁業が営まれていることから、一律の施策では解決が難しく、県では事案に応じた様々な施策を行っている。

近年、アサリ資源に大きな影響を与えるナルトビエイが大量に来遊するようになったため、駆除を実施している。アサリ資源回復のため、殻長制限や産卵期の禁漁等も実施している。生産力と栄養塩との関連を解明する必要があり、基礎データの蓄積と解析に努めていく。

トラフグについては、種苗放流による資源添加が重要である。放流方法や種苗の質が重要で、効果に差が表れる。特に放流場所が重要で、産卵・育成の場である瀬戸内海での放流が効果が高いとされている。瀬戸内海では、各県で漁業者が複雑にトラフグ資源を利用しており、関係者に資源管理の理解を得るためには、細かな調査と根拠のある説明が求められる。

アワビ等の資源については、県外からの密漁者が問題となっている。資源管理については、漁業者へ指導を行う一方、従来の慣習を見直し、資源が有効利用されるよう、働きかけを行っている。県には、資源管理を最も効果的に、最も適切に、科学的根拠に基づき導き出す役割が求められる。

第4セッション

12:30~14:30

テーマ： 中世大内文化から維新・近代化まで～いま求められる文化維新

座長： 湯川 洋司（山口大学人文学部 教授）

本セッションでは、文化的なテーマについて、山口県に関わる題材を発表いただく。ゆたかな海の再生を考えるうえで、技術的なテーマに加えて、精神の部分も学び取っていく必要があるだろう。日本がこれまで歩んできた経済成長に伴って忘れてきたもの、これから考えていかなければならないことなどを感じ取っていただければと思う。

☆サビエルが見た大内文化の山口

シャルコフ・ロバート（山口県立大学教授 国際化推進室長）

本発表は、日本に長期滞在している外国人という立場で、言語的な視点や異文化理解等の視点から考えたい。

サビエルが日本に来るときに、どの程度日本についての理解があったかは定かではなく、おそらくマルコポーロ（実際には日本に上陸していない）による情報のみであったと思われる。来日したサビエルは、宣教の許可を得るために大内義孝を訪ねるが、献上品を用意しなかったため、許可が下りなかった。しかし、日本の文化についての理解が進み、2度目に許可を求めたときは献上品を用意することで、許可が下りた。サビエルは、「アンジロウ」という日本人を通訳として宣教活動を行ったが、キリスト教徒ではなかったため、仏教の概念で説明した。その結果、サビエルはキリスト教ではなく新しい仏教を伝えに来たと誤解され、義孝も同様であったと考えられる。

サビエルは当初自分の考えを押し付けるところはあったと考えられるが、自分の考えを発信するためにはるばる山口までやってきたチャレンジ精神は学ぶべきものがあるだろう。

☆維新の裏話～いま求められる維新の精神

堀 雅昭（歴史作家）

明治維新は、英語では「Meiji Restoration」であり、古いものを復活させて新しいものに

することである。ヨーロッパでいうところの「Revolution」とは違う。西洋の「Revolution」は王を倒そうとするものであるが、日本の「Restoration」では天皇をいかに味方に付けるか（玉を奪う）という発想である。

招魂祭は「人を神として祀る」ことを江戸時代に始めたもので、これ以降、盛んに行われるようになった。明治維新で亡くなった高杉晋作らの招魂社を東京に作り、これが靖国神社となった。日本古来の神道は草や木に神が宿るといような考えであるが、人を神として祀ることはキリスト教的な考え方であり、靖国神社は西洋式の神社であるといえる。

明治維新は洋学と国学の融合によるものである。吉田松陰の「西洋歩兵論」は、これまでの身分を重視する儒教的な思想ではなく、身分にとらわれない西洋式の軍隊を作ろうとしたものである。高杉晋作の騎兵隊にはこの考えが取り入れられている。山口大学の前身である山口明倫館では、国学と洋学を融合した学問を教えていた。薩長同盟についても、鹿児島から山口はサビエルが通ってきた道であり、キリスト教の文化がすでにあつた藩同士が手を結んだものであろう。

☆金子みすゞの詩の世界

王菲（翻訳者・山口大学非常勤講師）、安楽寺子ども会

金子みすゞの詩はインターネットをきっかけに中国でも広く知られるところとなった。2008年の四川大地震では、みすゞの詩によって被災した子供たちが励まされ、癒されることとなった。みすゞの詩の一番の魅力は、自然への思いやる心や分かりやすい言葉、自由な発想、努力だと考え、現在でも国境を越えて愛される理由ではないだろうか。

講演後、安楽寺子ども会による金子みすゞの詩の朗読が行われた。

第5セッション

14:40～16:40

テーマ： 環境保全の技術としくみづくり～環境維新に向けて

座長： 浮田正夫（山口大学名誉教授）

本セッションは、海洋環境に関する技術について、藻場干潟の造成技術、ユニークな環境技術、そしてグローバル500を受賞した宇部方式について企業人の立場からご発表をいただく。

☆藻場・干潟造成技術の現状

高月邦夫（株）東京久栄 常務取締役技術本部長）

国民の望む環境規範は時代とともに変化し、1950～60年代は大気汚染・水質汚染が進んだため、個人の健康や生存の確保、70年代は生活環境の整備・改善、80年代は人と自然の触れ合いや快適な環境の整備、近年は人類の持続的な生存や地球生態系の保全へと移行していったのではないかと考える。これに伴い、行政の施策も変化してきた。大気・水質汚染の進んだ時代は、瀬戸内法のような規制を中心とする施策であったが、近年は藻場・干潟のような生物生息環境の修復・創出や、人と自然の触れ合い・レクリエーションの場の創出、美しい景観の創出等へと変化している。

近年の事業では、実施者以外の行政関係者、学識者、市民等様々な主体が参加し、現状把握、目標設定、そして目標達成のための計画や施行、維持管理を考え、完成したものは順応的管理を行っていくという包括的な計画が重要となっている。

藻場の造成については、実施海域の環境条件把握とともに、周辺から藻類の加入が期待できるかが重要である。胞子の供給が期待できる環境では、藻類の移植は少なくてもよいが、あまり期待できない環境では、移植が必要となる。そのほか、食害生物の生息状況や施工後の維持管理についても考えていく必要がある。

干潟の造成については、アサリの生息場となる人工干潟を目標とした事例を紹介する。実施海域には、まず浚渫土を敷設し、その上に覆砂を施した。これによって、浚渫土からの栄養塩溶出と底生微細藻類の増殖、それらを餌とするアサリの生育が期待された。また、被覆

網を設置することで、食害対策に加えて、アサリ稚貝の着底促進効果も確認された。

アマモ場については、酸素供給機能も有しており、貧酸素水がアマモ場を通過すると、酸素が供給される。酸素の供給源は、アマモそのものだけではなく、底生微細藻類や葉上微細藻類の役割も大きい。

☆マイクロバブル技術の環境分野への応用

中野陽一（米子工業高等専門学校 准教授）

マイクロバブルは大量の気体を液体中に分散させる技術であるが、海域やダム湖など水深の深い場所に酸素を供給しようとする、大きな圧力をかける必要があり、エネルギー消費も大きくなる。摩擦熱の発生も大きいため、活魚水槽等に使用する場合は冷却器が必要となる。また、窒素等の酸素以外の成分の溶解も大きくなるため、液体中の酸素の比率が低下するといった問題点がある。解決策として液膜を利用することで、より大量に、省エネルギーで気体を溶解させる装置を開発した。

☆企業から見た宇部方式の経緯と展望

千葉泰久（宇部商工会議所 会頭）

日本の社会は、50年前からGDPが増加し、世の中が豊かになるにつれ、物、人、サービス、情報そして心の時代へと移り変わってきた。これまでがむしろに頑張ってきた日本人が、胸に手を当ててこれからをどう生きるかゆったりと考える時代が来るだろう。

戦後、宇部市では煤塵等の公害が大きな問題となっていた。1949年、宇部市に降灰対策委員会が設置され、大気汚染と市民への影響調査を実施した。1960年頃、「ダスト・イズ・マネー」の概念を標榜し、市内の企業に集塵装置を設置し、回収した粉塵はセメントへ混入し商品化した。この取組により、徐々に粉塵は減少していった。また、緑化運動も広がりを見せた。その後は、大気汚染だけでなく水質・騒音・悪臭・振動等も対象とし、1970年には市民も加わり、産官学民共同でまちづくりを考える「宇部方式」となった。我々は、当時の人々の取組で改善した環境を享受していることを考えれば、先人に感謝をし、将来の人々に地球をきれいなまま渡せるかを考える必要がある。

今後は地球温暖化等の問題もあるが、知恵を出して、意識改革・技術革新をし、環境問題乗り越えて、地球環境と共生できるような生き方を考える必要がある。

◎総括・ポスター賞表彰式・閉会

16:40~17:00

1. 総括 瀬戸内海研究フォーラム in 山口 運営委員長 浮田 正夫

全体的に若い方による発表が多く、とても頼もしく感じた。環境問題は全般的に複雑になっている。このフォーラムを契機に、皆様のエネルギーになってもらえればありがたい。

2. 表彰式 特定非営利活動法人瀬戸内海研究会 理事長 松田 治

事務局による得票集計をもとに、運営委員長が最終決定した次の発表者に、松田理事長より表彰状及び副賞の授与がなされた。

最優秀賞

No. 24 「発見!! ”おいしい魅力” @沖洲人工海浜.or.jp」

野上 文子 沖洲海浜楽しむ会

優秀賞

No. 16 「山口湾における「あさり姫」実施に向けた事前調査について」

恵本 佑 山口県環境保健センター

No. 8 「鉄鋼スラグによる干潟再生」

奥田 哲士 広島大学環境安全センター

3. 閉会あいさつ 特定非営利活動法人瀬戸内海研究会議 副理事長 柳 哲雄

本フォーラムのなかで、栄養塩濃度が低下することで、生物生産性も低下しているという内容の発表があった。私の見解では、栄養塩と生物生産量にはもっと複雑な関係があると考えている。12月にワークショップを実施する予定なので、異論のある方はぜひ参加していただき、議論をしたいと考えている。瀬戸内海研究会議が瀬戸内海環境保全知事・市長会議から委託を受けている業務で、豊かな瀬戸内海を復活させるための施策提言を行うこととなっている。これらの成果は、現在環境省で進められている瀬戸内海環境保全基本計画の見直しに反映される重要な報告になる。関心のある方は、ぜひワークショップにご参加いただきたい。